

悪霊 第十部・取り憑かれし者たち

悪
霊
第十部・取り憑かれし者たち

【登場人物】

- 伊集院満枝……………北海道H市の地主の娘。川奈産業の大株主
- 安西小百合……………満枝とはI高等女学校の一年後輩。孤兒院建設に奔走する
- 猪俣佐和子……………元党員。上海で工作運動に従事。活動名・梅ハナ梅バチ
- 飯島貴代美……………元党中央委員。上海で工作運動に従事。活動名・芳芳フアンフアン
- 金沢文子……………貧民窟に暮らす少女
- 佳代……………貧しい農家の娘。安藤邸の女中
- 韓愛子ハンエジャ……………元玉ノ井の娼婦。日本での源氏名はまち子
- 李麗姫イヨヒ……………元女性抗日パルチザン。満枝の協力者
- 篠原ヨシ……………伊集院家の使用人
- 初代……………津島の妻。元弘前の芸者
- ミス・スメドレー……………上海在住のアメリカ人ジャーナリスト。
- 佐藤碧子……………菊池の秘書
- 小沼健吾……………元伊集院家の小作人。左翼運動から転向して国家主義者に
- 宮様……………陸軍大尉。参謀本部作戦課付
- 安藤澄……………東京帝国大学国史科助教授。安藤浄海の息子
- 北一輝……………国家主義者
- 馬海松……………『モダン日本』編集長
- 菊池寛……………文藝春秋社社長
- 津島修治……………作家志望の青年

- 山根教授……………弘前高校教授。孤兒院研究の第一人者
- 倉石……………県会議員
- 岡沢子爵の令息……………黒襟隊長
- 思芳……………支那人美少年
- 仁科中佐……………上海派遣軍将校
- 倉持英輔……………南京日本総領事館書記生

【時・場所】

昭和八年（一九三三）十二月～昭和九年六月。東京、弘前、北海道H市、上海、南京。

よく来てくれましたね、愛子に麗子。最近はどうも、お前たちの顔を見ないと、気が安まらなくって。私も、もう五十路。肩も凝るし、腰も痛い。それに、なんだか夜になるとさみしくってね。無性に涙がとまらなくなつて寝られない時だつてあるのだよ。

それにしても先の陛下が亡くなつてもう九年。昨年暮れにはやつと孫が、皇太子がお生まれ遊ばされて、これで皇家も安泰と肩の荷が下りた思いだったのに、またあんな忌まわしいことが起こるとは……。

岡沢子爵の次男坊が仲間を集め、イタリヤのファッシスト党だか、ドイツのナチスみたいな制服を着せて、狼藉をはたらいていることは知っていました。黒襟隊というのですか？ 皇室の藩屏たる華族ともあるう者が、成り上がりのムツソリーニやヒットラーの真似をして悦に入っているなんて、と呆れていましたが、それも無理なきこと。毎月三人か四人、華族の子弟が無惨な目にあつていのですもの。私の実家の方々も、今では護衛なしには出歩けないとか。

それもこれも、今上の陛下が即位されて以来、ずっと恐慌が続いていることと無関係ではありますまい。東北では身売りをする娘が絶えず、欠食児童も増える一方。そんななかで贅沢三昧する華族を恨む声が高まっても仕方がないのです。

でも、政府も重臣も、何もしようとはしない。弟宮殿下からうかがつた話ですが、政府の本音は、わが国が発展していくために、農業よりも工業を盛んにすることが大事なのだそうです。農

村を救済せず放置しておけば、窮した農民たちが都市に流れ込む。工場主は、彼等を安く雇うことができる、と。

なんとという非道でしよう。私、陛下に申し上げたのです。仮にも彼等は陛下の赤子。華族や財閥にはより多く税を出させ、かたわら民力を休養せしむるべきです、とね。すると陛下はなんと答えたか？ 立憲君主たる朕が政事に口を挟むことはできぬ、華族や財閥、重臣は朕が股肱、彼等の支えあつてこそ、皇家は安泰なのだ、と……。

先日も陛下は、弟宮と口論遊ばされていたのだよ。弟宮は軍隊にいらして、貧しい農家に生まれた兵隊たちの苦勞をよくご存じだからね。兵隊たちの妹が、娘が、人買いに売られていくのをよくご存じだからね。だから、君主たるものが赤子たる臣民の窮状になんの手も尽くさないのが許せないのだよ。

いや、つまらない愚痴をきかせてしまった。不思議なものだね。どうもお前たちを見てみると、なんでも話してしまふ。近頃はむしゃくしゃすることが多くて、しかしこのようなこと、滅多に誰彼となく話すわけにもいかず、つい、お前たちに腹の虫を見せてしまふのだよ。勘弁しておくれね。さあ、お茶を淹れよう。

ところで、あの騒々しい学者、安藤といったか、彼はまだ見つけられぬのか。ほら、『古語実記』の解説が終わつたというので、南北朝の御代に吉野の隈沢家が埋蔵した「竜珠」……麗子の持つている菊花の紋の刀子、愛子の持つ李花の紋の刀子、それに加えて三つの宝を併せ持つ者が三国を統べるという「竜珠」。それを探しにかの地に赴いてから、はや一月になるといふのに何の音信もない。どうも私は、あの安藤という学者、信用できぬ。もつとしっかりした者を奈良

へやったほうがよいのではないか。ああ、待ち遠しい。その「竜珠」さえ手に入れば、私の気持ちも落ち着こうものを。

ああ、また愚痴になった。すまないねえ。お茶がはいった。さあ、お呑み。福岡県の八女から届いた玉露だよ。

それにしても、いやな噂を聞いた。華族の子弟を無惨な目に遭わせている犯人は、朝鮮から渡ってきた連中だということではないか。満州との国境で暴れている共産匪族が日本に密入国して、テロルを行っているのではないかと言うのだよ。どう思う？ 恐ろしいことだ。内鮮融和の精神を解せぬ不逞の輩が帝国を脅かしているというのに、警察は犯人を挙げられない。このままでは、支那人や朝鮮人から侮りを受け、万邦無比の国体も我らの代で終わりに成りはしまいか。

やはり「竜珠」、「竜珠」を早く私のもとへ。愛子、麗子、頼むから私の心を安らかにしてくれ。いつものように……。

「ばああの相手も楽じゃないわ」

ソファに深々と身を沈め、テーブルに両足を揃えて乗せながら、李麗姫は煙草の煙を天井に吹き上げた。

「年をとると、感じ方が鈍くなるのかしら。二人がかりでも結構時間がかかるのよ」

若くてきれいな女の肌ならばよいけれど……。そう言つて顔を擧げる麗姫に、伊集院満枝は「ご苦労様」と囁き、腕を回して麗姫の肩を抱いた。

満枝が東京に所有する洋館の応接室。赤坂御所での皇太后との密会を報告に訪れた麗姫と並ん

で座り、満枝は麗姫の頬に唇を押し当てて言った。

「口直しをしたいなら、今、してもいいのよ」

満枝に眼を向け、麗姫は言った。

「慰めてくれるの？」

麗姫はかすかに微笑み、それから面差しを悲しげに歪めた。

「あなたに分かる？ 私が、どんな辛い思いで、あのばああに……」

麗姫の眼に涙が溢れだした。満枝は、麗姫の小柄な体を抱きしめ、ごめんね、と呟いた。

「いいのよ」

満枝に抱きすくめられ、麗姫は懸命に面差しを引き締め、唇を震わせた。

「すべては復讐のため。わが民族を辱めた大日本帝国の懷に飛び込み、その辜丸を蹴り潰すためだということは分かっている。でも……」

麗姫は、満枝をそっと押し戻し、その面差しを見つめて言った。

「ばああの体を嘗めているとき、私は満枝の顔を思い浮かべて我慢しているのよ」

満枝は再び、麗姫を抱きしめた。ソファに押し倒し、唇と唇を重ねた。

その二時間後。

遅れて現れた韓愛子を交えて、満枝と麗姫は応接室のソファで向かい合った。

「おばあちゃん、そんなに焦っているの？」

眼を見開いて微笑んで問う満枝に、麗姫と愛子は揃って頷いた。麗姫が答えた。

「一刻も早く竜珠を手に入れぬことには、夜も寝られないですよ」
愛子が続けた。

「安藤じゃなく、もっとしつかりした人を遣わしてほしいと言っていたわ」

「ねえ、そろそろ竜珠を出してもいいんじゃないの？ とつくに作ってあるんでしょ」

麗姫がうんざり顔を作った。

「でないよ、私たち、またあのばあに呼び出されて、お相手しなくちゃならなくなるわ」

「そうねえ」

満枝は頬に人さし指を押し当てて言った。

「ただ、出てくるだけじゃ面白くないわね」

訝しげな面差しいぶかの麗姫と愛子に、満枝は微笑み、それから思いをめぐらすように眼差しを空に向けた。

麻布こまかい 弐町にある安藤澄の玄関の上がりかまち 櫃に正座して、佳代は、両手を床についたまま、ぽかんと黒い羽織袴姿の来客たちを見上げていた

「安藤先生は御在宅ではないのか？」

五人の男たちの前列中央に立つ古風な八の字髭の男が、割れ鐘がねのような声を張り上げた。佳代は無言で首を振った。八の字髭は重ねて問うた。

「では、いつお帰りか？」

佳代は首を傾げ、じっと考え込んでいた。男たちは互いの顔を見やり、囁ささやきあった。ばかじゃ

ないのか？

八の字髭は怒りを押し殺してさらに問うた。

「お帰りになるまで、待たせていただいてもよいのか？」

佳代はしばし考え、それから立ち上がり、男たちに背を向けて歩き出した。廊下の突き当たり、曲がり角の前に立ち止まり、あつげにとられて玄関に立ちつくす男たちのほうに振り返り、不思議そうな顔で小首を傾げた。男たちはますます困惑したが、一人がふと思いついて問うた。あがれ、ということか？

佳代は頷き、角を曲がって消えた。男たちは慌てて靴を脱ぎ、玄関をあがって佳代を追った。

「ところで、君」

広い畳敷きの応接間に通され、正座した男たちに佳代が茶を運んで配っていると、八の字髭が顔をあげて声をかけた。

「君は、もうこの新聞は読んだのかね？」

そう言つて、懐から新聞紙を取り出して、佳代の目の前に置いた。佳代が手にとって見ると、「帝大助教授、不敬の言動か？」との見出しの横に、安藤の顔写真が載っていた。

——東京帝大文学部の安藤澄助教授は、近年、ろくに大学にも顔を出さず、休講が続いて同僚教授陣や学生たちの不審を呼んでいたが、実は同助教授は、しきりと奈良県の山奥で調査をしていることが判った。なんでも同助教授は、かつて後醍醐ごたいごの帝が吉野に南朝を開かれた際、京の都より持ち出された秘宝を所持する者こそ、日本、支那、朝鮮を統べる帝王たるものという怪しげな風説を吹聴し、秘宝を所有する真の帝王が奈良の山奥におわすと探し回っているという。

——安藤助教授の言動につき、ある識者曰く、言うまでもなく、わが大日本帝国を統べておわすは、畏くも 天皇陛下御一人である。『万邦無比なるわが国体』なる著書を書いたこともあるはずの安藤助教授の言動は、まさにわが国体を辱め、破壊せんとするものである。「どう思うね？」

記事を読み終えた頃合いを見計らって、八の字髭が佳代に問うた。佳代は新聞紙から顔をあげ、困惑した面差しを浮かべるだけだった。

「君、字は読めますか？」

苛立ちを押さえ、八の字髭は一同の年長者らしく、いきりたつ男たちを宥めるように目配せをし、優しいな声音で問うた。佳代は頷いた。八の字髭は続けた。

「我々は、憂国の士として、かかる不敬の言動をなす安藤先生に御諫言申し上げに参つたのだ。もちろん先生の釈明によって我々が納得さえすれば、おとなしく引き上げる……」

「だが」

八の字髭の隣に坐っていた瘦せぎすの男が口を挟んだ。

「返答如何によつては、斬る」

男の手元には、刀身を仕込んだと思しき杖がおいてあった。

「やめたまえ」

八の字髭は瘦せぎすの男を叱りつけ、佳代に向かって言った。

「そういう次第であるから、是非とも先生に御面会賜りたい。君、せめて先生は今日、ここに帰られるのか、帰られるとしたら何時頃なのか、教えてくれないかね」

佳代は黙って首を傾げていたが、やがて静かに立ち上がり、応接室を去った。しばらくして戻ってきて、八の字髭の前に紙片を置いた。取り上げると電報だった。こう書かれていた。

「トウブン カヘラヌ アンドウ」

「まったく、冗談じゃない！」

安藤澄は、しきりと汗を拭きながら、テーブルを叩いてわめいた。

「出鱈目だ、まったくの出鱈目だ。いったい何だってこんな出鱈目を……」

テーブルに広げられた新聞紙には、「帝大助教授、不敬の言動か？」の見出しの下、くだんの記事が掲載されている。

「まあ、落ち着いてください」

出鱈目という単語を繰り返す安藤を見やりつつ、優雅な手つきで紅茶の碗を口に運びながら、伊集院満枝は静かに微笑んだ。

前年の夏、安藤は吉野の隈沢家に赴き、それを所持する者こそ日本、支那、朝鮮を統べる帝王の印とされる竜珠のありかを記したとされる古文書を撮影した。持ち帰ったフィルムを現像し、神代文字で書かれた古文書を解読するため、図書館に籠もった。江戸時代の平田篤胤ら国学者の文献と照らし合わせて解読を終えたのは、今年の冬だった。竜珠のありかが見つかりました、ここに違いありません、と興奮して報告してきた安藤に、満枝は旅費を与えた。雪解けを待つて意気揚々と奈良に向かった安藤だが、調査をはじめて一月後、安藤を不敬と告発する新聞記事が全国紙に掲載されたのだった。

安藤を吊し上げようと右翼の壮士たちが奈良に向かった。とても調査を続けるどころではなく、倉皇として東京に逃げ戻り、満枝の洋館に駆け込んできたのは、昨夜の事だった。興奮してまくしたてる安藤をなだめ、酒を飲ませて寝室に押し込んだ。

そしてこの朝、目が覚めるや安藤は、出された朝食のパンと紅茶に手もつけず、ダイニングの食卓に向き合って座った満枝に、溜まり溜まったらしい憤懣をぶちまけはじめたのだ。

「落ち着いていられますか」

安藤はいきりたって続けた。

「奈良の山奥をさんざん歩き回って、くたくたになつて旅館に戻ったら、いきなり壮士どもに取り囲まれたんです。幸い、宿の者が警察を呼んでくれて事なきを得たが、東京に帰ってきたら、連日連夜、右翼や新聞記者が押しかけてきて、自分の家に入ることすらできんですぞ。どうしてくれるんです？」

「それは、お困りでしょうね」

「大困りです。それより……」

安藤は身を乗り出した。

「そもそも、なぜこの件が新聞に漏れたんですか？」

安藤は疑わしそくに満枝の顔を覗き込んだ。

「この調査は、極秘だったはずですよ。誰かがばらさなけりゃ、新聞に知れるはずがない。知っているのは、私に、あの青年将校たち、愛子、麗子、そして……」

静かに見返す満枝を凝視し、穿鑿するように安藤は続けた。

「満枝さん、あんただ」

「もうお一方いらしてよ」

澄まし顔で言う満枝に、安藤はますます身を乗り出した。

「誰です」

「宮様」

安藤は口を閉ざした。言うまでもなく、大尉として陸軍参謀本部に勤務する、今上陛下の弟宮のことである。

「宮様がお漏らしあそばしたのかもしれないね」

くすくす笑う満枝を、安藤はあつけにとられて見つめていたが、悪い冗談はやめていただきたい、と不機嫌げにうつむいた。満枝は、失礼いたしました、お気を悪くなさらないでね、と頭をさげ、居ずまいを正して言った。

「正直申し上げて、宮様はご不興なのですよ」

え……。顔をあげた安藤に、満枝は声を潜めた。

「なぜ新聞にこんな記事が出てしまったのか。あなたが奈良で、竜珠について言いふらしたからではないかとお疑いなのです」

「そ、そんな」

安藤は慌てふためいた。

「私は、そんなことは一言も……」

「本当におっしゃっていないのですか」

静かな、しかし鞭を振り下ろすような声音で、満枝は言った。

奈良にくだった安藤は、帝大助教授の肩書きから、地元の人々に下にも置かれぬ歓待を受けた。連日続いた酒宴で、果たしてどんな事を喋ったのか、思い出せない。ひよっとしてあの時……。

瞬きもせず、凝然と見つめてくる満枝の眼差しから逃れるように、安藤はうなだれた。

「やはり、そうなのですね……」

満枝はため息をついた。安藤が何か言いかけたが手を上げて制止、「言い訳をうかがう気はございません」と突き放し、うなだれて床に眼を落とす安藤の、しよげた子犬のような様子に、頬を緩ませてかすかに笑い、笑いを収めて言った。

「さて、この始末、どうお付けになるおつもり？」

「し、始末……？」

安藤はうろたえた。ようござんすか？ 低い声音で満枝は続けた。あなたは、畏れ多くも弟宮殿下をご不快にさせたのですよ。竜珠の秘密を公にしたばかりでなく、あまつさえ不敬のレッテルを貼られたのです。

「磯村中尉殿たちも、動いてらっしゃるみたい」

「磯村中尉が……！」

安藤の顔が引きつった。磯村中尉は、安藤の邸で、満枝が語る「竜珠」にまつわる「秘話」を聞いた皇道派青年将校たちの一人だ。

「林原少尉殿なんかは、あなたを斬ると息巻いているとか。普段は林原さんの止め役をつとめてらっしゃる磯村中尉や香野中尉も、制止するどころかかんかんになってらっしゃるそう。単に怒っ

てらっしゃるだけではなく、渋谷少尉殿あたりを通じて、弟宮殿下の御意向を受けて動いてらっしゃるのかもしれないね」

「え……すると、つまり、その……」

「そう」

満枝は、椅子から立ち上がって歩き出し、安藤の背後に回った。息づかいも荒く上下する安藤の肩に両手を置き、耳元で囁いた。

「民間右翼だけならともかく、軍まで敵に回したとなると、あなたをお守りするのは、難しゅうございますわ」

伊集院さん！ 安藤は椅子を蹴るようにして立ち上がり、満枝に顔を向けた。そのまま膝をつくと、床に額をすりつけて懇願した。お願いです、なんとかしてください、どうか宮様をお宥め申し上げてください、償いはなんでも致します……。

「償いですか……」

土下座する安藤を冷たく見下ろして、満枝は頬に人差し指をあて、しばし考え込んだ。

数日後。

安藤澄は、東京駅から特急「富士」に乗り、東海道線を西に向かった。山陽本線に乗り継ぎ、さらに兵庫姫路駅で作新線に乗り換え、岡山県の津山駅で下車。駅で馬車を雇って山道を進み、目的地である集落到着くまでに、一日半を要した。

「少し、休みたいんだが」

鳥打ち帽をかぶり、緋の着流しを尻からげにし、駱駝の股引をさらした安藤は、疲労困憊の態で座り込んだ。

「だらしのないのね」

去っていく馬車を見送りながら、伊集院満枝は溜息をついた。薄汚れた着物に手ぬぐいをほっかぶり、風呂敷包みを担いだ姿は、安藤と旅の行商をしている夫婦に見えた。

「あなたが元氣すぎるんです」

満枝が手渡した水筒を奪い取るようにして水を飲み干した安藤は、肩で息をしながら言った。満枝は何も答えず、踵を返して歩き始めた。ま、待ってくれ。安藤は慌てて立ち上がった。すでに日は西に傾き、急速に暗くなりつつあった。馬車を帰らせた場所は集落のはずれ。山々に囲まれた谷間に、ぼつんぼつんと三軒ほど見える茅葺きの農家まで、歩いて三十分もかかるだろうか。かなりの距離があった。

「今日は、あの農家に泊まるんですか？」

そう問う安藤に、満枝は眼を丸くした。泊まる？ 馬鹿は休み休み言いなさい。今から、竜珠を掘り出すんです。そもそも、人に見られたら困るから、夕方に着くよう手配したのですから。

安藤は呆然と立ちすくんだ。すでに太陽は、その下端が山の稜線に接するばかりに傾いている。弟宮様の不興を買ったと言われ、青年将校や右翼の襲撃に怯える安藤に、満枝が朗報をもたらしたのは、出発の前日だった。

分かりましたよ、「竜珠」のありかが。満枝は安藤に、一枚の紙を手渡した。タイプライターで打たれた文字は「ご依頼の文書（『古語実記』）を鑑定の結果、竜珠が埋蔵されているのは奈良の山中ではない事が判明しました」と書き出されている。末尾には、國學院大学国史学科教授の署名があった。帝大教授の自分より、格下の私立学校の学者の言うことを信じるのですか……と口を尖らせた安藤の顔に、平手打ちが浴びせられた。呆然となった安藤を、満枝は怒気も露わに叱りつけた。

要するに、あなたの解説が間違っていたのです。『古語実記』によると、足利幕府が奉じる北朝と、幕府に抵抗する後醍醐の帝の後裔である南朝とが、南北合一によって数十年の抗争に終止符を討った後、後醍醐帝の御玄孫にあらせられる小倉宮は、あくまでも足利幕府に抗されたまい、比叡山にて討ち果てられた。その折、備前美作の豪族・山名某と申す者、小倉宮の御忘れ形見を擁し奉り、美作の地に落ち延び、竜珠をかの地に秘匿したとか。美作は今の岡山県の北部。さっそく調べさせたところ、山名某が建立した神社があり、その宝物殿に「竜珠」らしき宝物が蔵せられているとのこと。

もし、その宝物が真の「竜珠」であれば、それを献上し奉ることで、今からでも汚名を返上することもできるでしょう。如何なさいますか？

安藤は二つ返事で承諾した。かくして、満枝と安藤は行商夫婦に身をやつし、岡山県北部の山奥の集落を訪れたのである。

すっかり暗くなった畦道を、満枝は慣れた調子ですたすたと歩いた。その後ろを、こわごわと周囲を見回しながら、足を引きずるようにして安藤が続く。

ふと、目の前に小高い丘が見えてきた。鬱蒼と丘を包むように生えている木々の隙間から、明かりが漏れている。

「あれですわ」

明かりを指さし、満枝は丘に向かった。緩やかな斜面を、木の間を縫ってしばらく登った。やがて丘のてっぺんに着いた。杉の木に囲まれ、寂れた神社の拝殿があった。拝殿の階の手前に、農婦のようないでたちの女が二人、松明を持って立っている。

「お待たせ」

伊集院満枝は、笑顔で二人の女に声をかけた。女たちが歩み寄ってきた。ゆらめく火影が逆光となつてよく見えなかった顔立ちが、次第に明らかになった。安藤は思わず叫んだ。

「き、君たちは！」

李麗姫と韓愛子だった。南朝と李朝のお姫様が、なぜ、このいでたちでこんなところに……。

いぶかる暇もなかった。小走りに駆け寄ってきた麗姫が、安藤の股間を蹴り上げた。二つの辜丸が、麗姫の膝と己の尾踏骨の間でひしゃげた。凄まじい激痛と、こみあげる嘔吐に、安藤はくずおれた。

「潰してはいないわよね」

悶絶する安藤を見下ろしながら、満枝が麗姫に問うた。麗姫は「仕方ないから、手加減した」と首を振って笑った。残念ね、と愛子が呟いた。こんな奴、きんたま潰してやりたいわ。

「残念だけど、この人には自害してもらわなきゃならないの」

満枝は微笑みながら、背に担いだ風呂敷包みをおろした。包みをほどくと、白無垢の寝衣と、日本刀が出てきた。満枝は言った。

「不敬の罪を働いた責めを負って、日本男兒らしく割腹自殺する。日本人は死者に鞭打つ事を

憚るふうがあるから、これで新聞記者も後追い取材は謹むはず……。自害する前に辜丸が潰れていたことがわかったら、せっかくの筋書きが台無しになりますからね」

ここまで来てもらって、去勢しないで終わるのは申し訳ないけれど、我慢してね。女たちと笑いさざめく満枝に、安藤は眼を見開き、身を起こして何か言おうとして、激痛に苛まれ仰向けに地面に転がった。その股間を愛子が蹴りつけた。安藤は海老ぞりになり、失神した。

「お父様と違って、名誉ある死に方を与えてあげるのだから、感謝してほしいわ」
そう言いつつ、満枝は刀身を抜きはなった。

その二日後だった。「帝大助教授、不敬の汚名を雪ぐため、覚悟の割腹自殺」「岡山県山中の神社で発見さる」「遺書は見つからず」の見出しが、新聞各紙に躍った。

「安藤助教授には、気の毒でした」

赤坂御所。狭い茶室で振る舞われた茶を飲み干し、碗を畳に置きながら伊集院満枝は言った。

「あんな記事が出なければ……とても悔やまれます」

地味な和服に身を包んだ満枝にちらりと視線を送り、「宮様」は口を開いた。

……ありもせぬ竜珠に躍らされ、命を落としたわけだね。

……ありもせぬの言葉に、思わず瞬きをとめた満枝に、「宮様」はさらに言葉を重ねた。

……母なる陛下はご落胆のあまり、病の床に臥された。

皇太后のことである。

「申し訳ございませんでした」

満枝は、畳に指をつき、深々と頭を下げた。

「あんな軽忽な男に、竜珠探しをゆだねたのが、間違いだったのです」

おや、そうかね。

硬く冷たい声音に、満枝は頭をあげた。「宮様」はじつと、満枝を凝視していた。

……あんな軽忽な男だからこそ、あなたは竜珠探しを任せただけでしょう？

満枝は口を噤んだまま「宮様」を見つめ返した。「宮様」の頬がゆるみ、唇に笑みが浮かんだ。

……ありませぬ竜珠をもとに、あなたは母なる皇太后陛下に近づいた。あなたの目論見が奈辺にあるか、私は穿鑿しようとは思わない。

だが……。『宮様』は続けた。あの弘前での夜、あなたはどうかやら、私が胸の奥底に押し殺していた ambition に火をつけたようだ。

母なる皇太后陛下はもとより、いま、すべての国民が不安を抱いている。長引く不景気、支那の動乱。華族や資産家の子弟が惨殺され犯人は捕まらい。怯えた華族たちは自警団を組織し、朝鮮人や下層労働者を襲う。朝鮮人や下層労働者はしばしば暴動を起こし、官憲と衝突する。もはや、この国からは秩序も調和も失われた。

「秩序が失われた国の民は、より強い指導者を求めるもの」

満枝は言った。

「殿下こそ、滅び行く国家の救世主となるべき御方と存じます」

一瞬、「宮様」の眼が見開かれ、大きな哄笑が続いた。顎を天井に向けてそっくり返って笑っ

た「宮様」は、やがて居住まいを正して言った。

「むしろ私は、皇国を滅ぼす者になるかもしれない」

落ち着いた声音で、「宮様」は続けた。

……私は、望んで皇家に生まれたわけではない。私は、生まれた時から皇族で、皇室の一員として育てられ、皇室の一員として振る舞うことを余儀なくされた。妃を迎えたが選んだのは私ではない。私は、陛下を補佐して皇国の社稷を守らねばならない。陸軍に入れられたのもそのためだが、軍人の道もまた私が選んだわけではない。

……幼い頃、明治大帝について教わった。幼少の身で即位し、御一新によって大権の総覧者に祭り上げられ、大久保利通、伊藤博文、山県有朋ら元勳に支えられながら、日清・日露の戦を勝ち抜いた祖父なる大帝は、あるいは国を守ることに生き甲斐を見出されたかもしれぬ。だが、孫である私は、国を守ることに喜びを見出せぬのだよ。

……わが父なる大正の帝は、元来お弱い生まれにもかかわらず、祖父と同じ大帝として振る舞うことを強いられた。早く崩御されたのは、国を背負うことの重みに耐えかねた父の、御心労ゆえであるう。

……その後を継がれた兄なる陛下もまた、国を守ることに喜びを感じておられるようには見えぬ。否、兄が守りたいのは国ではない。国を統べているようにも見えぬ。兄の役目は、この皇国の華族や重臣、すなわち特権階級を守ることであって、民を慈しむことではない。いかに皇族が民を慈しもうとしても、特権階級の既得の利益に反することはできない。兄なる陛下は、そのことをよくお分かりになっておられる。その御内心は忸怩たる思いでおありになろうとも、君主

として日々、振る舞うしかない。その虚しさやいかばかりであろう……。

「すなわち……」

満枝は静かに口を挟んだ。

「殿下は、民を慈しむ為政者におなりになりたい、と？」

無言で頷く「宮様」に、満枝はさらに言った。

「大日本帝国が、帝を頂く皇国であり、殿下が皇室の一員であるかぎり、それは叶わぬ夢なのですね」

頷かず、やや眼を伏せた「宮様」に、満枝はこう言って結んだ。

「つまり、皇国を滅ぼせば、その夢は叶いますわね」

その日の夜。

自宅の洋館に戻った満枝は、寝室に入ってスカートを脱ぎ、その裾に血痕がこびりついているのに気づいた。

さきほど去勢した、見知らぬ紳士のものだろう。

やめられないわね、このあそびだけは……。

満枝は口に出して呟き、ベッドに腰をおろした。

はじめて男性の股間を蹴ったのは十歳の時だった。父・伊集院大吉の死因——何者かに睾丸を潰された——についての噂を聞き、試してみたくなった。父の墓をお参りしていた小作人の小沼健吾と出くわした時、満枝の頭は、この異常な欲望で満たされていた。小沼を蹴り上げたのは、

意識してのことではなかった。体が勝手に動いた。蹴り上げた後、悶絶する小沼の姿に、満枝の陰部から味わったことのない悦楽がこみあげた。その日の夜、満枝ははじめて自慰を覚えた。

初めて男を去勢したのは十五歳の時だった。その頃の満枝は、夜になると宿題のかたわら、ノオトに自らの妄想を書き付ける事が日課だった。妄想のなかで満枝は、思う存分、おおぜいの男たちの睾丸を潰した。睾丸を潰された男たちは、あの時の小沼と同様、両手で股間を押さえ、地面を転がって悶え苦しんだ。悶え苦しんで、その後どうなるのだろうか？ 満枝は図書館に通い、医学書を読みあさった。睾丸の機能や男性の性欲のあり方については詳しくなったが、では、その睾丸を潰された男がどうなるかまで書いてある本は見つけられなかった。

ある日、満枝は学校の帰り、林に囲まれた人けのない道を歩いていた。ふと目の前を、檻籠をまとい頭陀袋を担いだ男が、足を引きずるように歩いているのが見えた。周囲には誰もいない。男性と二人きりになる状況は、四年前、小沼の股間を蹴り上げて以来だった。

満枝の体が、四年前と同様、またも自然に動いた。満枝は背後から、男の股間を蹴り上げた。男の頭陀袋が道に落ちた。両手で股間を押さえて地面に座り込んだ男は、やがて俯せに倒れた。

四年前と同様、陰部からこみあげてくる悦楽に身を震わせつつ、満枝は周囲を見回した。やはり誰もいない。今だ。

満枝は、悶絶する男の足首を掴み、林の中に引きずり込んだ。男の頭陀袋を開けた。丸めた汚い布きれを引っ張り出し、男の両手を背中に回して縛り上げ、猿ぐつわをはめた。ノオトに何度も何度も書き付けたとおりの手順だった。誰にも気づかれず、男の股間を蹴って倒し、束縛した事に、満枝の体内に疼く悦楽はますます高まっていった。

満枝は、男を仰向けにし、股間に右足の踵かかとをかけた。まず左の睾丸を踏みつけ、一気に体重をかけた。踵の下で肉球が弾はじけ、一瞬、履はいていた洋靴を押し上げた。男は激しく痙攣けいれんし、すぐに動かなくなった。

満枝は、男の猿ぐつわを外した。男は眼を見開き、口をだらしなく開けていた。やがて胃袋からこみ上げてきた血反吐ちへんどが、唇の端から漏れはじめた時、満枝は地面にしゃがみこんだ。スカートのなかに手を入れ、夢中で陰部をまさぐった。ひとしきり自慰に耽たり、絶頂に達した時、すでに日は西の山に沈み、急速に暗くなっていた。

我われに返った満枝は、急速に恐怖心が胸の裡うちを覆っていくのを覚えた。男は、仰向けに倒れたまま、じっと動かなかった。おそろおそろ、心臓に手を当てた。かすかに動いている。まだ生きている。生きていてよかつたとは思わなかつた。生きてこの事を喋られたらおしまいだ……。

爪先で男の股間をまさぐった。右の睾丸がまだ残っていた。満枝は夢中で、残った睾丸に踵を乗せ、踏み潰した。失神していた男の喉から咆哮ほうぼうが迸ほとばしった。暴れ出した男にはねとばされ、尻餅をついた満枝は、激しく七転八倒する男を、眼を見開いて見つめた。逃げ出したくなかつたが、恐怖でからだは動かなかった。

やがて男の呻うめき声が弱々しくなり、身動きを止めた。闇と静寂が周囲を包んだ。満枝は立ち上がり、両手で身を覆おほい、泣きじゃくりながら家路についた。

それからしばらく、満枝は妄想をやめた。幸い、見知らぬ男の睾丸を潰した一件は表沙汰にならなかつた。男が死んだのかどうかも分からない。そのまま二年が過ぎた。女学校を卒業する年になった時、急に縁談が持ち上がった。相手は川奈産業の御曹司・昭一郎しやういちろうだつた。それまで封

印してきた「去勢」への欲求が蘇よみがえつた。その年、満枝は十人を超える男を去勢した。

それから五年。二十三歳になった今まで、満枝が去勢した男は数えきれない。その多くを死に至らしめた。別に悔いることも、良心の咎とがめを覚えることもない。ただ、初めて男を去勢した頃の、身が弾けそうになるような昂奮は、この頃なくなつてきた。

癖くせになつているだけなのかもしれない……。
 そう口に出して呟つぶやき、やがて首を横に振つた。

いいえ。

男を去勢するより以上の喜びを、満枝は見つけた。

……国を滅ぼす。

今日、茶室で「宮様」がその言葉を口に出した時、満枝ははつきり悟つたのだ。自分の欲望が言葉として明確になつた。なぜ自分は「湖南省農民運動視察報告」に惹ひかれたのか、なぜ小沼健吾を支援してきたのか、なぜ猪俣佐和子を「党」の活動に送り込んだのか、なぜ自分はいま「大日本帝国の懷に飛び込み、柔らかな急所」を潰そうとしているのか。

自覚のないまま、欲望に突き動かされるままに重ねてきた自分の行動に、はじめて「言葉」が与えられた。

国を滅ぼす。

滅ぼしたかつたのだわ、私は……。満枝は胸の裡で呟いた。地主の娘だから。何不自由なく育つたから。お金がたくさんあつたから。美貌に恵まれていたから。そうした、与えられたものすべてを、滅ぼしたかつたのだ、と。